

今年開山1300年の節目を迎えた倶利伽羅山。地元住民によると、倶利伽羅不動寺発祥の地として知られる不動ヶ池をはじめ、山頂に近い倶利伽羅区では昔から水が豊富に得られた一方で、津幡側に高低差で1000mほど下った山森区ではほとんど湧き水がなく、苦勞したと伝わる。水は上から下に流れてたまるのに、なぜ山頂付近の方が豊かなのか。気になった地元住民が金大の塚脇真一教授に調査を依頼したと聞き、同行した。

(吉田良平)

倶利伽羅山(276・8m)麓の刈安公民館で塚脇教授、山名一男公民館長、高山吉廣倶利伽羅区長と待ち合わせ、まずは標高1600mの山森区へ向かった。地層が露出している斜面の前で車を降り、塚脇教授が表面を薄く削るとそのまま薄い板状の土が取れた。塚脇教授は「ぎめの細かい泥岩層で中が詰まっているから崩れない。水を通しにくい性質があるんだよ」と教えてくれた。

続いて山頂付近の標高2600m地点に場所を移し、同じように露出している斜面の土を少し削ってみた。今度は、もろく崩れて粒の粗い砂になった。塚脇教授によると、柔らかな砂岩層で粒の間に空間ができるため、水を地下に通しやすいのだという。

湧き水分ける二つの地層



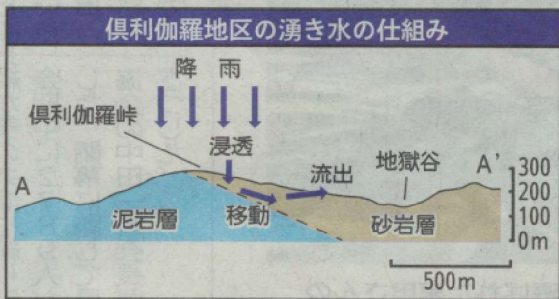
上は豊富、下は出ず

なるほど。倶利伽羅山には性質の異なる2種の層が混在していることは分かった。ただ倶利伽羅区と山森区の集落は直線距離で500mほどしか離れていない。なぜ、湧き水に差が生じるのか。疑問に思っていると、塚脇教授の種明かし

が始まった。

倶利伽羅山を境に津幡側は主に水を通さない泥岩層、小矢部側は主に水を通す砂岩層が分布している。地表から地中に浸透した水は泥岩層に行き当たった地点で滞留するため、境目付近では地下水が得られるというわけだ。

ただ、泥岩層の上にかぶさるように砂岩層があり、地中では境目が斜めに走っ



ている。砂岩層で覆われた山頂付近の倶利伽羅区では縦穴や横穴を掘って2種の層の境目に到達すれば、水が得られた。一方で、地中深くまで泥岩層の山森区ではいくら掘っても水が出ないことになる。

謎の残る不動ヶ池 全てを聞き終え、高山区長が「確かに、倶利伽羅の集落では横穴を50mほど掘って、水を得ていた」と納得顔で話し始めた。「でも、不動ヶ池は勝手に湧いていたのでは？」と新たな疑問を投げ掛けてみた。

塚脇教授は「今回は地中まで調べていないから、2種の層の境目がどこにあるのか正確な位置は分からない。じまいたったとした上で、可能性として▽泥岩層にあり雨水などの表層水が貯まった▽偶然2層の境目が地表に露出する場所だった▽人為的に作られた」の三つを挙げた。

今後の詳しい調査で、長年の謎の答えが明らかになるかもしれない。期待して山を下りた。

倶利伽羅山の頂上付近で話し合う塚脇教授(右)、山名刈安公民館長(中央)、高山倶利伽羅区長

津幡町倶利伽羅